

## ローマ人への手紙12章1-2節 「神の憐れみへの応答」

### 1A 「献げる」 1

1B 神の憐れみ

2B 嘆願

3B 自分の体

1C 生きたささげ物

2C 理にかなった礼拝

### 2A 「変えられる」 2

1B この世との調子

2B 自分の変貌

1C 思いの一新

2C 神のみこころ

## 本文

ローマ人への手紙 12 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、11 章まで先週来ました。今朝は、初めの 2 節、1-2 節を見ていきます。午後に残りの 3 節以降を見ていきます。「<sup>1</sup>ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。<sup>2</sup>この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」

私たちは一昨日、すばらしいバプテスマ式の恵みにあずかることができました。主の死とよみがえりに、自分自身が結ばれて、自分も古い人が死に、キリストにある新しい命で生きます。このことを人々の前で証人になってもらうというのが、バプテスマの意味です。これは、神がキリストにあって自分にくださったことを、自分自身を主にお献げするということで応答しました。これまでは心で信じて、口で告白しました。これから私たちが見ていくのは、その応答です。

私たちは、何事でもそうですが、聞いたことに対して、応答しなければ、聞いただけで終わってしまいます。しばしば、福音を語ると起こることで、お礼をして、「良いお話でした」との感想だけを述べて、その後の生活は何一つ変わらないということがありますね。礼儀を尽くすことはしておられても、福音には応答していないのです。イエス様も、良い土に落ちる種だけが、実を結ぶことができることをお語りになりました。

## 1A 「献げる」 1

### 1B 神の憐れみ

私たちは、これまでローマ人への手紙で、神がキリストにあって、私たちのために行ってくださいましたことを見てきました。福音の、いわば「教え」であります。その根底には、「神の憐れみ」であることが明らかにされました。「11:32 神は、すべての人を不従順のうちに閉じ込めましたが、それはすべての人をあわれむためだったのです。」

私たちは、自分の不従順によって滅びなければいけないのが当然であるのに、それでも裁きを受けないで済むようにしておられる。今も、生きるようにしておられるという憐れみがあります。パウロは、手紙の中で何度となく、神の深い憐れみを受けて慰めを受けていることを述べています。例えば、「Ⅱコリ 1:3 私たちの主イエス・キリストの父である神、あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神がほめたたえられますように。」自分が使徒としての働きに召されていることを自覚しているパウロが、同じく牧会者になっているテモテに対して、「恵みとあわれみと平安がありますように。」と挨拶の言葉を送っています(Ⅰテモ 1:2)。彼が、恵みと平安の間に憐れみを入れているのは、「自分自身は、キリスト者を迫害するとんでもない野郎、神の厳しい怒りを受けて当たり前の人なのに、それでも救ってくださった」という恐れです。

このような深い憐れみに押し出されるようにして、私たちが勧められていることが、「自分のからだを神に献げる」ということであります。覚えていますか、ローマ 9 章では、神が、ご自分が憐れむ人を憐れみ、「9:16 これは人の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」と言っていましたね。それで冒頭は、「ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます。」とあるのです。私たちが、神にどれだけ献げることができているか？という話があり、あたかも私たちの努力や願いによるかのように語られがちですが、そうではなく、自分がどれほど神の憐れみを必要としているか、それが分かっていること。つまり、へりくだりなのだという事です。ミカも、こう預言しました。「6:7-8 【主】は幾千の雄羊、幾万の油を喜ばれるだろうか。私の背きのために、私の長子を、私のたましいの罪のために、胎の実を献げるべきだろうか。8 主はあなたに告げられた。人よ、何が良いことなのか、【主】があなたに何を求めておられるのかを。それは、ただ公正を行い、誠実を愛し、へりくだって、あなたの神とともに歩むことではないか。」

### 2B 嘆願

そして、「勧めます」という言葉にも注意してください。これは、「嘆願する」とも訳すことのできる言葉です。使徒として大きな權威の与えられているパウロをしても、信者たちに嘆願しているといのは驚きます。例えばパウロは、このような嘆願をしています。「Ⅱコリ 5:20 こういうわけで、神が私たちを通して勧めておられるのですから、私たちはキリストに代わる使節なのです。私たちはキリストに代わって願います。神と和解させていただきなさい。」神が自分たちを通して勧めておられる、嘆願しておられるということなのです。

なぜ、こうも、神ご自身が下手に出て来られるのでしょうか？全知全能の神、全権を持っておられる方が、こんな小さき私たちを、すべてを献げるように命令しても、よさそうなものです。自分自身を献げることに神が話される時に、神ご自身が、これは自発的なものであることをよく知っておられるからです。レビ記において、全焼のいけにえなど、「進んで」という自発的に献げるものであることが書かれています(7:16 など)。主ご自身の慈愛に触れられて、それで応答として献げるのですから、そこに強制が入ってはならないのです。それでは、献げることを無くしてしまいます。

エペソ5章では、妻に対して、夫に対しての勧めがあります。そこで、妻は、教会がキリストに従っているように、夫に従いなさい。それから夫に対しては、キリストが教会を愛して、命を捨てられたように、妻を自分のからだのようにして愛しなさい、と教えています。よく考えてみてください、自分のすべてを夫に従わせるって、かなり危険なことですよ！事実、夫の立場を悪用して、家庭内暴力などは深刻です。妻が夫に従えるのは、あくまでも、夫が妻を愛しているという安心感があるからです。私たちが、キリストにすべてを明け渡せるのは、キリストがすべて、命さえもお捨てになったという愛があるからで、その安心感、保証から、すべてを明け渡すことができます。ですから、どんなに、大切なことであっても、神は切に願い、強く勧めることはあっても、強制はできず、勧め、励ますように神ご自身がされているのです。自ら進んで、だからこそ意味があります。

ですから、逆に言うと、私たちは自ら決断して、献げる必要があります。一度も見たことのないイサクの妻になるために、アブラハムの使いと共に家を離れたリベカがいますね。だれも、彼女にそうしろと言わなかったのに、彼女が決めました。ルツもそうですね、彼女は逆に、姑ナオミに、「自分の民、自分の神のところに帰りなさい。」と言われていたのです。ナオミとしては、彼女のことを思ってそういったのです。けれども、ルツは逆に、「あなたの民は、わたしの民。あなたの神は、わたしの神」と言いました。自分自身が献げると決める、強い自発性が求められるのです。

### 3B 自分の体

#### 1C 生きたささげ物

そしてパウロは、「**あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。**」と言っています。これはとても興味深い、神にいけにえを献げるのではなく、自分自身が生きたささげ物になるのです！レビ記などで、祭司が神に祭壇で、牛や羊などを献げる命令が書かれています。レビ記1章を見てください。

1:3-9 そのささげ物が牛の全焼のささげ物である場合には、傷のない雄を献げなければならない。その人は自分が【主】の前に受け入れられるように、それを会見の天幕の入り口に連れて行き、4 その全焼のささげ物の頭に手を置く。それがその人のための宥めとなり、彼は受け入れられる。5 その若い牛は【主】の前で屠り、祭司であるアロンの子らがその血を携えて行って、会見の天幕の

入り口にある祭壇の側面にその血を振りかける。6 また、全焼のささげ物はその皮を剥ぎ、各部に切り分ける。7 祭司であるアロンの子らは祭壇の上に火を置き、その火の上に薪を整える。8 祭司であるアロンの子らは、その切り分けた各部と、頭と脂肪を祭壇の火の上の薪の上に整える。9 内臓と足は水で洗う。祭司はこれらすべてを祭壇の上で焼いて煙にする。これは全焼のささげ物、【主】への食物のささげ物、芳ばしい香りである。

これが、ささげ物です。パウロは、「**神に喜ばれる**」と言っていますね。これが最後に、「**芳ばしい香り**」とありますね、ここの部分です。神が、祭壇で牛肉が焼かれた、その香りを芳ばしいとみなされて、喜んで受け取っておられるのです。私たちがバーベキューで、すごい匂い！と思って、喜んでおられるのと同じです！主が、いけにえを喜んで受け入れておられるのです。そして、「**聖なる**」とありますね。これは、3 節の「**傷のない雄**」とありますね。ささげ物には、傷や欠陥があってははいけません。これは第一に、キリストご自身を示しています。この方が肉体を取られて、すべて父のみこころに従い、傷も汚れもない方であり、その献身を神は喜ばれました。そこで第二に、キリストにあって、私たちが、同じように自身を献げる姿になっています。

大事なものは、心や思いを献げるだけでなく、からだそのものを献げることです。からだを動かすことです。キリスト教会は、「主は見た目ではなく、心を見ておられる。」という言葉で、悪用している時があります。からだを動かさないで、行いにおいては何も見えないのに、「いいえ、私は心と思いでは信じていますから。」と言い訳をすることです。からだは動いていないのなら、具体的な献身に表れていないのなら、実は心も思いも、主から離れているのです。もちろん、身体的な障害や、限界の話は今、しているものではありません。むしろ、自分に力が与えられているのに、それをもって体を動かしていないのなら、それは心と思いの表れでもあるということです。

パウロは、きちんと教える人でしたが、体を動かす人でした。ローマ行きの船が遭難しかけて、マルタ島にたどり着くことができた後に、体を温めるために薪を拾ってきている姿があります。彼は動いていました。テサロニケ人への手紙第二 3 章において、主がもう戻って来られるのだからとして、仕事をしていない怠惰な者たちについて、厳しく警告しています。「Ⅱテサ 3:6-8 兄弟たち、私たちの主イエス・キリストの名によって命じます。怠惰な歩みをして、私たちから受け継いだ教えに従わない兄弟は、みな避けなさい。7 どのように私たちを見習うべきか、あなたがた自身が知っているのです。あなたがたの間で、私たちは怠惰に暮らすことはなく、8 人からただでもらったパンを食べることもしませんでした。むしろ、あなたがたのだれにも負担をかけないように、夜昼、勞し苦しみながら働きました。」

そして、興味深いのは、パウロは「**生きたささげ物**」と言っていることですね。当たり前ですが、私たちが牛や羊のいけにえのように、屠られてはたまったものではないです！そして、この生きる、というのは肉体においてもそうですが、御霊によっても生きておられることを意味しています。新約聖

書では、こうした表現がいくつかあります。例えば、「あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ」なさいと、ペテロが第一の手紙で話しています(2:5)。石も、石で造られる神殿も、生きていませんが、御霊によって新しく生まれた私たち自身が、生ける石であり、生ける神の家なのだ、ということです。これは、ずいぶんと当事者になったということですね。この後で、ペテロは私たちが、聖なる祭司になっていると話しています。旧約の律法に出て来る祭司の奉仕を見ますと、私たちはとかく、私のような牧者のことだと見なし、一般のイスラエル人が自分たち信徒だとみなしますが、いいえ、そんなこと書いていません。献身をするのは、神の憐れみを受けたすべての者であるし、祭司としての務めも、御霊によって生まれたすべての者たちです。

今回、無観客でのオリンピックになりました。観客で参加できるのが、オンラインで、ネット上だけの鑑賞となっています。けれども変わらないのは選手たちです。彼らこそが当事者です。私たちは時々、自分たちが熱心になっているから、それで参加していると思い込みます。選手に対して過度に批判する「教会のここの部分は間違っている、正さないといけない。」と言いながら、自分自身はその奉仕に関わっているわけではないのです。それは、観客であっても選手ではないのです。私たち自身が神の家であり、神に対する祭司であり、当事者なんですね。

### 2C 理にかなった礼拝

そして、「**それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。**」と言っています。ここの「礼拝」は、「礼拝奉仕」と訳したらよいでしょうか。礼拝なのですが、神に仕えるという意味合いでの礼拝です。そして、「**ふさわしい**」と訳されているのは、「理にかなった」とも訳すことのできる言葉です。つまり、自分のからだを、神に喜ばれる、生きたささげ物として献げることこそが、理にかなった神への礼拝なのです。

私たちは、どうしても「便利」な社会に流れてしまいます。自分のからだを献げるとは、不便であり、面倒くさいことであり、不都合であり、無駄が多いと感じます。だから、どんどん、やることを簡略化しようとしています。自分のやっていることができるように、または自分のやりたいことができるように、礼拝方式でさえ変えようとしてしまいます。けれども、「奉仕者の心得」の学びで学びますが、「何ができるか？ではなく、いつでも用意ができています。」という姿勢です。

一見、無駄に思えることを行うのが礼拝です。そんなに賛美の音楽の技術を高めたいなら、名の知れた音楽家を外注すればよいのです。そんなに説教の内容を高めたいならば、優れた説教者のメッセージをここで流せばよいのです。いつか、AI 技術の組み込まれたロボットをここにおいて、ロボットお坊さんならず、ロボット牧師を置けばよいのです。でも、どうでしょうか？ 献げることそのものが、神に喜ばれ、受け入れられるものなのです。これなしに、礼拝は成り立ちません。ダビデは、命がけでベツレヘムの井戸から水を汲みに戻ってきた勇士たちの水を、なんと地面に流して主を礼拝しました。こんな犠牲を払われた水は自分は飲めない、主に献げるとしたのです。

おそらく今の時価であれば、100万円はしたであろう香油を、イエス様の足にすべて注いでしまったマリアがいます。弟子たちは責めましたが、イエス様は擁護されました。自分自身を献げることが、理にかなっていないのではなく、逆です。これこそが理にかなっています。

## 2A 「変えられる」 2

ところで、ある人が面白いことを言いました。「生けるささげ物の問題は、祭壇の上に置かれても、そのまま留まろうとしないことだ。そこから降りてきてしまう。」笑いました。確かにその通りです。けれども、イサクがまさにそうでしたね。父アブラハムが、彼をしぼりつけ、祭壇に置いた時にいくらでも抵抗できたはずですが、父に言われるままにしました。この、生きているからこそその問題については、2節で取り組みます。2節での鍵となる言葉は、「変えられなさい」です。1節では「献げなさい」ですが、献身の生活の中で、「変えられる」過程が伴います。

### 1B この世との調子

変えられるにあたって、「この世と調子を合わせてはいけません。」という勧めが初めに来ます。調子を合わせることをしないという否定。そして次の、「自分を変えていただく」ということ。この二つを対比すると非常に興味深いです。「調子を合わせる」は、英語で conform であり、ギリシヤ語では、スキーマティズー(συσχηματίζω)であります。外側のかたちに自分を合わせる、という意味です。いわゆる「型にはめる」例えば、巷で流行っている服を、自分も身に着けるのは、これに当たります。その一方、「自分を変える」のは、英語で transform であり、ギリシヤ語では、メタモルフェオー(μεταμορφώω)です。これは、内側から変化することを意味し、例えばいもむしが蝶に変態するとき、この言葉を使います。つまり、私たちは、外側のものに自分を合わせてはならず、むしろ、内側から変えられなさい、と仰うことです。

しばしば、私たちは、自分は主体的な人間だと思います。そして、キリスト教に入るとなると、何か決められた型に入り込まれると思ってしまう。現実には、その反対です。実は、生まれながらの、そのままの自分は、世が持っている型にはめられていく人生なのです。神によって造られた、神のかたちである自分から損なわれて、世にある型にはめられていて、それが自分の自然な姿だと思っているのです。「エペ 2:1-2 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、2 かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」自分自身が意識していなくとも、いや意識していなからこそ、この世の流れにそのまま従っているのです。そして、本当の自分らしさというものはどこかに追いやられて、型の中にはめられています。

### 2B 自分の変貌

パウロは、「むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。」と仰っています。御霊によって私たちは新しく生まれました。内側から変えられました。さなぎが蝶に変わるように、後

には、死者からの復活によって、私たちの体自体も、栄光の姿に変えられます。それまでの間、私たちの思いが日々、新たにされていくのであり、自分が思いを新たにしていこうことによって、変えられていくのです。

### 1C 思いの一新

この「**心を新たに**する」という言葉ですが、これは「思い」と訳したほうがいいです。心を新しくするのは、御霊によることです。私たちが心を新たにすることも、御霊が新しくしてくださいませ。「エペ 4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言えば、人を欺く情欲によって腐敗していき古い人を、あなたがたが脱ぎ捨てること、23 また、あなたがたが**霊と心において新しく**され続け、24 真理に基づく義と聖をもって、神にかたどり造られた新しい人を着ることでした。」霊と心において、新しくされていきます。そして、私たちが意志を使って、思いにおいて積極的に御霊に従うことによって、御霊が思いにも心にも働いてくださるのです。新たにしていこうのは、「思い」のほうです。すでに、私たちは、「8:5-6 肉に従う者は肉に属することを考えますが、御霊に従う者は御霊に属することを考えます。6 肉の思いは死ですが、御霊の思いはいのちと平安です。」

ゆえに、私たちの不断の努力が必要であることが、ここで分かるでしょう。日々、御言葉に触れること。毎日、祈ること。事あるごとに祈ること。そして共に集まることを怠らないこと。思いを新たにすることによって、御霊が私たちを変えて行ってくださいますが、その働きの中にいないと、自分は自由だと思っても、世にある価値観へのこだわりから抜け出すことはできません。自分自身で、これが世にあるものということと、こちらが神のみこころにあることだとする区別がつかないのです。」主の名のために行っているのだと思っていることが、実は、世のやり方であったりすることは、しばしばあります。そこで、自分の歩みについて、みことばによって日々、確かめていくのです。果たして、これはみこころにかなったことなのかどうか？そして、そういった思いの中での訓練によって、神に知恵を求め、神は必ず知恵をくださいます。

### 2C 神のみこころ

最後に、「**そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。**」ということです。みこころが何かが見分けるようになっていきます。これまで、多くの兄弟姉妹に相談を受けてきました。いや、私自身が分からないで求めました、「みこころは何か？」ということです。その答えが、まさにここにあります。思いを新たにすることで、自分を御霊に変えていただくことです。そうすれば、みこころが分かります。

みこころについてですが、パウロは、「**何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのか**」と、もっと具体的に話しています。良いことを見分けることができます。悪からも離れることができます。「Iテサ 5:22 あらゆる形の悪から離れなさい。」ともパウロは言いました。悪ではない、罪ではないと思っ

由に言った言葉が、自分のことを良く知らない人たちから聞いたら悪口であることがあります。「息抜きに、憂さ晴らしをしないと。」と思っていたらどうでしょう？これは世に調子を合わせていることです。真実は、教会全体に傷や苦みを残していき、癒えるまでに時間がかかるのです。

若い男女が、いくら肉体関係を持ちませんと言っても、同じ宿に泊まったら、罪は犯してなくても、明らかに悪とみなされます。「いや、そんなことぐらい、いいんじゃないの？」と思われるかもしれませんが、その「そんなことぐらい」が、実は世に調子を合わせていることですね。肉体関係を持てば、霊的にもつながりができてしまいます。肉体と霊を切り離すことができているのですが、それは、グノーシス主義的な考えで、当時、実際に異端があって、肉体で行っていることは神との関係に影響はないとするものなのです。

次に、「**神に喜ばれ**」ることかどうかを、見分けることができます。「ヘブル 11:6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。」神を信じるということは、神がおられることを信じていることです。今、自分の行っていること、言っていることを人間的に考えたら、別にやったってかまわないことがあるでしょう。でも、神がそこにおられる時に、同じことをやれますか？同じことを言えますか？神を喜ばせているのか、悲しませているのか、考えないといけないですね。

そして、「**完全であるのか**」ということですが、これは、全うするというような意味合いです。神ご自身と言ってもよいでしょう。私たちは決して完全になっていないのですが、完全な方に捉えられ、その方の内にいます。絶えず、この方から賞を得るために、一心に走っています。例えば、敵を愛することについて、12章の終わりに出てきます。そんなことできっこないと思っても、それでも、キリストの似姿に変えられる中で、その完全な姿に近づいていきます。

いかがでしょうか？私たちは、自分自身を生きたさげ物として神にささげます。その中で、いつの間にか世の流れに従っていくと、祭壇から降りて行ってしまうこともあるのです。イサクのように、生きたままいかに、祭壇の上にいることができるのか？思いを新たにしてください。神に向かってください。そうした時間を持ってください。日々、内なる人が新たにされていきます。